



Title	ミケル・デュフレンヌの美学思想における想像力とイメージ
Author(s)	川瀬, 智之
Citation	形象. 2018, 3, p. 28-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75809
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ミケル・デュフレヌの 美学思想における想像力とイメージ

川瀬 智之

はじめに

本論文の目的は、ミケル・デュフレヌ（一九一〇—一九九五）におけるイメージ概念を明らかにすることである。デュフレヌは二十世紀後半のフランスにおいて活動した美学者であるが、その思想に関して、これまでに多くの研究が行われてきたとは言い難い¹。近年、デュフレヌについての研究書がフランスにおいて相次いで出版されたとはいえ、その思想の全体像を明らかにするには程遠いという状況である²。彼が扱ったテーマの中で、イメージの概念は、彼の著作に頻出する重要なものである。またイメージの問題は、想像力の問題と切り離すことはできないが、この概念も、デュフレヌの初期から晩年までの思想の一貫したテーマをなしている。本論文では、特に初期のデュフレヌの想像力やイメージについての思考を、サルトルの想像力論と比較しながら

考えることにしたい。これまでに筆者が確認しえた限り、デュフレヌの想像力の概念を主題的に扱った論文は、エドワード・S・ケーシーの「仲介としての想像力」のみである³。ケーシーは、デュフレヌの一九五〇年代から六〇年代にかけての想像力論を全般的に扱い、デュフレヌの想像力論が上位と下位の能力に挟まれた中間的能力であり、美的経験においては抑制されるものであることを論じている。特にこの美的経験における想像力の働きについては本論文も論じていくが、本論文はその対象をデュフレヌの初期思想に限定し、それを詳しく論じる。またケーシーの研究は、デュフレヌの想像力論がサルトルのそれと異なるということを、ほんの一文のみで述べているが、本論文は、サルトルの想像力論とデュフレヌの想像力論とを明確に対比させて論じる。まず、第一節では、前提として、超越論的想像力との関連から、美的対象として現われる芸術作品の、感覚的現前

という性格について論じる。次に、第二節では、サルトルの想像力論をデュフレヌがどのように批判しているか、両者の対立点はどこにあるのかをみていく。最後に第三節では、デュフレヌが美的経験における経験的想像力の働きについてどのように考えているかを検討する。その結果として、デュフレヌにおいてイメージとは潜在的な知としての記憶が知覚に組み込まれたもののことを言い、デュフレヌはむしろ芸術において想像力が抑制されることを重視していたこと、そして、それがサルトルと比較して、身体性を強調する思想の一つの帰結であることを論じる。

第一節 デュフレヌにおける超越論的想像力

デュフレヌにおけるイメージ概念とはどのようなものであるのか、そして彼がそれを美学的な観点からどのように考えているのかということを検討するために、まず、想像力に関するデュフレヌの議論を確認しよう⁴。まず、ここでは、一九五三年に発表された『美的経験の現象学』の「表象と想像力」と題された章における記述を見てみよう⁵。

超越論的には、想像力は或る所与があるようにするのであり、経験的には、この所与が或る意味を持つようにする、なぜならこの所与は諸々の可能なものによって豊かにされているのだから。(PE35)

ここでデュフレヌは、想像力を二つに分類している。一つは超越論的想像力であり、もう一つは、経験的想像力である。経験的想像力については後で検討することにして、ここではまず、超越論的想像力について見てみよう。ここでデュフレヌは、超越論的想像力は、「或る所与があるようにする」ものだと言っている。これに関連して、彼は次のように言っている。

そして空間と時間はまさに或る総合が行使され得る領野であり、それらを聞くことは、この総合の可能性を構成することである。それら自身はさらに、純粋な多様性を取り集める総合的行為のおかげでのみ表象され得る。それらは純粋な総合の純粋な対象であるところの諸々の場所、諸々の瞬間の常に可能な結びつきである。かくし

て想像力は、それが統合することができるからこそ見させることができるのである（…）。我々には、これらの連合をまさに、身体によって、生きられたもののレベルで展開された活動に帰すことが必要である。このことは、総合の能力としての想像力が、身体のものとなされ得るのであり、したがって、超越論的なものはまた身体的であるということでは何を言っているのだろうか。（PE41）

デュフレンヌは、想像力が時間と空間の成立に関わるものであること、そしてその成立を条件として、何かを見るということが可能になることを述べている。それは、先の引用において「所与がある」と言われていた事態に相当すると考えられるものであり、ここで想像力と言われているものは、超越論的想像力のことを指している。さらに、ここでは、この想像力は身体に帰せられるものであることを述べている。純粹な多様性を取り集めるといふことに関しては、同じ『美的経験の現象学』の「現前」と題された章における次の文章を見よう。

感覚的なものの多様性はまずは或る共通感覚によって取り集められる、それはつまり、等個性と間感覚的な移行の、つねにすでに整備された体系であるところの身体であり、多様性以前に与えられた或る統一性があるのは、身体にとってなのである。（PE426）

この引用において、共通感覚としての身体は、「多様性」を「取り集め」、「統一性」をもたらすものであるとされている。つまり、或る所与が見えるものとして現前するのは、ある統一性を持ったものとしてであるが、その統一性と、身体とは対応した関係にあるということなのである⁷。

美的な経験の対象は、まずはこのレベルで捉えられる。デュフレンヌは、「美的対象の統一性があるのは（…）身体によってである」（PE426）と述べ、また次のように言う。

美的対象はまずは感覚的なものの開花なのであり、そのあらゆる意味は感覚的なものうちに与えられる。感覚的なものはまさに身体によって迎えられるのでなければならぬ。（PE425）

デュフレヌはここにおいて、通常の知覚から美的対象の知覚を説明するというよりも、通常の知覚を説明するために美的対象を持ち出している。美的対象も含めて、対象が統一的なものとして現われるのは、身体の働きによってなのである。そして、「感覚的なものの開花」ということに関しては、デュフレヌは、さらに別の個所で、次のように言っている。

美的対象、それはまず感覚的なものの抗しがたく素晴らしい現前である。或る一つのメロディーは、もしも我々に押し寄せる音の流れでないとしたら何だろうか？ また或る一つの詩は、やはり耳がその魅惑に包まれる語の輝きや調和でないとしたら何だろうか？ 絵画は、色彩の戯れでないとしたら？ そしてミニュメントさえも、石の感覚的效果、そのマッス、その反射、そのつやでないとしたら？ (PE127)

ここでデュフレヌは、音が「押し寄せる」とか、耳が「魅惑に包まれる」という言い方をしているが、それは、美的対象の感覚的現前が混然としたカオスとして現われ、それを経験するものが我を忘れるというようなものではない。デュフ

レンヌは、美的対象の意味について、「この意味は感覚的なものに内在しているのであり、その組織そのものなのである」(PE4)と言う。彼は別の個所で、美的対象において感覚的なものは「その展開の厳密さによっていわば自分自身で自らを言う」(PE4)とも述べている。つまり、美的対象は、感覚的なものが現前しているものとして捉えられるのだが、それが特に美的だというのは、感覚的なものの、感覚的なものとしてのあり方がとりわけ強調されて現れているということである。そして、そのことが強調されるのは、それが厳密に組織化されていることが感じられる場合なのである。このようにデュフレヌは、超越論的想像力の働きを身体に帰すとともに、美的経験がその身体性を前提とするものであることを強調している。だが美的経験には経験的想像力も働いている。次節以降でその点を検討しよう。

第二節 デュフレヌによるサルトルの想像力論への批判

前節で見た通り、美的対象は感覚的なものの現前として、さらにはその開花として捉えられる。とはいえ、芸術作品が

美的対象として捉えられるときに、このような感覚的現前がそのすべての体験をなすとは言えない。デュフレンヌはシャルル八世という人物を描いた絵画という例を挙げ、次のように言う。

シャルル八世は、美的対象ではない。この美的対象という名前はタブローに、いわば諸々の現出の総体にとつておく必要がある。これらの現出はシャルル八世を意味するが、それは、シャルル八世がそれらの現出から分離され得ず、シャルル八世がそれら現出にとつて、現出が現出であるための、そして意味作用を行う現出という存在を実現するための、単に手段であるという仕方においてなのである。(P451)

ここで、美的対象という名前をそれにとつておくべきだと
言われている「諸々の現出の総体」は、これまでに見た、組織化された感覚的なものを指している。この引用において特徴的なのは、表象されたものとしてのシャルル八世に必ずしも高い価値が与えられていないということである。つまり、シャルル八世は感覚的なものの開花の口実に過ぎない

のであり、美的対象ではないとまで言われている。デュフレンヌがこのように言うのは、この文章が、サルトルを批判する意図をもって書かれているからである。実際、この文章の前の部分で、デュフレンヌは、「(…)我々はサルトルのように『美的対象としてのシャルル八世』について語ることはできないであろう」(P452)と言っている。そこで、デュフレンヌの想像力論とイメーシ論の特徴を見るために、サルトルの議論を確認しておこう。

サルトルは、その著作『想像的なもの』において、想像力の働きについて様々な例を挙げながら論じているが、その中の、絵画について論じた部分を見てみよう。

たとえば、私はフィレンツェのウフィツィ美術館でシャルル八世の肖像画を眺める。私はシャルル八世、いわば一人の死者が問題になっているのだということを知っている。(…)この唇は同時に働く二重の機能を持っている。すなわち一方ではこの唇はずっと以前に塵と化してしまった現実の唇へと向かわせ、そのことよつてのみ意味を持つ。だが他方で、唇は私の感受性に直接働きかける、なぜならその唇は見る者をだますものであるか

らであり、タブローの彩られた斑点は額や唇のように与えられるからである。ついにはこれらの二つの機能は融合し、我々はイメージに満ちた状態となり、いわば、消え去ったシャルル八世がそこにいて、我々の前に現前しているのである。我々が見ているのはシャルル八世であり、タブローではない、しかしながら我々はシャルル八世をそこにいないものとして措定するのである。我々は彼に《イメージにおいて》、タブローの媒介によって到達するのである⁸⁾。

ここでサルトルは、シャルル八世の肖像画を見るという例を用いて、想像力が絵画を見る際にどのように働くかについて論じている。絵画を見る人は、一方では、すでに亡くなつてこの世にいないシャルル八世に思いを馳せている。他方で、描かれた限りでのシャルル八世の要素となつて唇の色は実際にキャンバス上にあり、それが見る者に働きかける。その結果、あたかもシャルル八世自身がそこにいるかのように思われるようになる。その時、シャルル八世は、イメージとして現われているが、これは、肖像画としてのタブローとは別の仕方で見られている。つまり、シャルル八世は

イメージとして現われているのであり、タブローは、そのイメージが生じるための機能は果たしているが、それとして見られているわけではない。絵を見る側の意識の二つのあり方について、サルトルは次のように言う。

私たちはまず、このシャルル八世が或る対象であることを理解した。だがもちろん、それはタブロー、キャンバス、絵画の實在的諸層と同じ対象ではない。私たちがキャンバスや枠をそれとしてみなす限り、《シャルル八世》という美的対象は現れない。それは、この美的対象がタブローによつて隠されているということではなく、實在化する意識にはそれは現れないということなのである。《シャルル八世》という美的対象は、世界の無化を前提する根本的な回心を果たす意識が、自らを想像するものとして構成する、まさにその時に現われるのである⁹⁾。

つまり、見る者の意識が實在的なものを対象とする意識から想像する意識に転換するのでなければ美的対象としてのシャルル八世というイメージは現れないのである。ひとたび

想像する意識が生じれば、実在化の意識は背後に退く。そして、サルトルは、実在化の意識の対象であるタブローを、イメージが現れるための媒介としての「アナログン analogon」であると考える¹⁰。このように、サルトルは、タブローとイメージを意識とその対象の関係の観点からはつきりと区別するのである。

さて、デュフレンヌ論の文脈においてこのようなサルトルの議論を見る場合に、重要になるのが、サルトルが美的対象として考えているものがイメージであつて、タブローではないということである。デュフレンヌは、先にも引用したように、美的対象という名前はタブローに与えられるべきものであると言う。サルトルがイメージと呼ぶものを、デュフレンヌは「表象された対象 objet representé」(PE49)と呼ぶが、デュフレンヌにおいて、表象された対象としてのシャルル二世は、感覚的なものとしての美的対象が開花するための、いわば口実としての役割を持つている。また、次の文にも、サルトルとデュフレンヌの対立点を見出すことができる。

表象された対象は、非実在的なものであるが、それを与える現出によって実在的なものにつながっている。美的

事物は実在的なものであるが、それは表象の手段であるのだから、非実在化されている。(PE49)

デュフレンヌは、「想像力は、サルトルが信じるほどには、知覚に対して根本的に異質なものではないように思われる」(PE49)と述べる。知覚と想像力が相互に異質なものではないとすれば、それに対応して、実在的なものと非実在的なものは互いに浸透しあつており、それらを切り離すことはできないのである。そうだとすれば、知覚されたものは少なくとも多少は想像的なものだということになり、そうであるならば、知覚されたものの一種である美的対象も、想像的なものであり得るということになる。しかし、デュフレンヌは、それを否定する。彼は、「だがそのこと(想像力が知覚に対して根本的に異質ではないこと、引用者注)は、知覚される対象である美的対象が想像的なものであり得るということを意味しているわけではない」(PE49)。つまり、知覚は想像力と無縁ではないが、美的対象は想像的なものではないということである。ここでデュフレンヌは一見したところ矛盾したことを言っているように思われる。これを解く鍵は、デュフレンヌにおいて経験的想像力がどのように位置づけられて

いるかという点にある。彼は、「逆に、私たちは、想像力が、少なくともその経験的な相においては、美的知覚において優越的な役割を担っていないと考えるのである」(PE49)と述べる。デュフレンヌがこのように述べるのは、デュフレンヌとサルトルの間にある、イメージというものをどのように考えるかに関する相違点に関わっている¹¹。次節ではデュフレンヌのイメージ概念について見てみよう。

第三節 デュフレンヌにおける経験的想像力とイメージ

第一節の冒頭で、デュフレンヌが超越論的想像力と経験的想像力を区別している文章を引用したが、その後の部分で、彼は経験的想像力について説明している。すでに引用した部分も含めて検討してみよう。

超越論的には、想像力は或る所与があるようにするのであり、経験的には、この所与が或る意味を持つようにする、なぜならこの所与は諸々の可能なものによって豊かにされているのだから。

この可能性の源は何であり、どのようにそれがイメージとして介入するのだろうか？ 実際のところ想像力が、現出を展開し活気づけるために知覚にもたらずもの、それを想像力は無から作り出すのではない。想像力が表象を養うのは、生きられた経験においてすでに構成された諸々の知をもつてである。より正確に言えば、想像力は二重の役割を担っている。すなわち、想像力は知を動員し、またそれは獲得されたものを見えるものに変えるのである。(PE435)

超越論的想像力は空間と時間を開くが、そのことによって、何ものかが現出することが可能になる。そこで現出したもの、ここではそれが所与と呼ばれているが、経験的想像力は、これに、過去の知覚経験から得られた知を持ち込むとデュフレンヌは言う。それによって、所与は表象となる。ここで知と言われているものが何かということについては、より具体的な事例が扱われている次の文章を見てみよう。

私は雪が冷たいということを知っているが、それはつまり、私は自分がこの冷たさについてなした経験の記憶を

現働化できるということである。だが、私が雪を見ると、雪は私がこの現働化を行うことなしに私に冷たいものとして現われる。それはつまりまずは、冷たさが冷たさの知を思い出させるような何らかの推論によって知られるのではないということ、そして冷たさは例えば白さが見られるように感じられるでもないということである。非概念的でありながら非感覺的でもあるこの種の直接的現前は、まさに雪の知覚に付き添い、その知覚を雄弁なものにする冷たさの《イメージ》である。(PE47)

今「私」は雪を見ているが、この「私」はまだその雪に触れていない。しかし、「私」はその雪を冷たいものとして知覚している。これが可能なのは、「私」が過去に雪を見て触れた経験があるからである。過去に雪に触れ、その冷たさを感じたことは、記憶として残っている。デュフレンヌはこの記憶のことを「知」と呼ぶ。そして、この「知」は、それを意図的に思い起こすことなしに現在の知覚に組み込まれる。それによって現在の雪は冷たいものとして、かつ、実際にその冷たさを触覚によって感じるることなしに知覚される。ここで「知」という言葉と「イメージ」という言葉が用いられて

いるが、デュフレンヌはこれを区別している。冷たい雪の知覚の例に先立って、デュフレンヌは、イメージについて、次のように書いている。

知覚に固有なことは、これらの知がそこにおいて知として、いわば知覚されたものに外側からつけ加えられるような追加情報のように、あるいはテクストに加えられる注釈のように喚起されるのではないということであって、知はそこにおいて知覚された事物の意味として、それと共に、それにおいて与えられているのである。我々が想像力に帰するのはこの知の近さである、というのがこのように統合された知はまさにイメージと呼ばれるべきだからである。(PE47)

つまり、知とイメージとは位相が異なっており、知覚されたものうちに現働化され、その意味となっている限りの知がイメージと呼ばれるのである。だからこそ、「(…)世界は、暗黙の裡に同時にイメージとして我々に現前しているものでなければ、我々に血肉を具えたものとして現前しない」(PE38)と言われるのである¹²。

このように通常の知覚における経験的想像力の働きについて説明した後に、デュフレヌは、それと対比させながら、美的対象の知覚について次のように言う。

(…) 通常の知覚を完成し活気づける経験的想像力は、美的知覚によって、かき立てられるというよりもむしろ抑制される。(…) なぜか？ 一言で言えば、美的対象によって与えられる光景は自足しており、コクをつける必要があるのである。(PE448)

ここでデュフレヌが言っている、「コクをつけられる」というのは、先の引用で見た、所与に対して経験的想像力が知を統合し、それによって対象が表象として知覚されるということを指している。そして、美的対象の知覚においては、このような経験的想像力の働きが抑制されると言うのである。抑制されるというのは、まったく働かないということではない。絵画に描かれたシャルル八世についての言及に続いて、デュフレヌは次のように言う。

その時私は、想像的態度とは反対に知覚的態度をとって

いるとさえ言えるのだろうか？ 否、というのも、私はもはや斑点を色として、線をデッサンとしてさえ知覚していない。それはやはり知覚することではあるが、タブローを知覚することではもはやない。私がタブローをそれとして見るや否や、その主題が私に現われるのでなければならぬし、主題が私に現われるという点において私は想像しているのである。(PE51)

デュフレヌは、想像的態度と知覚的態度の対立というサルトルの議論を批判するが、美的対象は知覚されるものだからといって、そこにおいてはもっぱら知覚のみが働いていると言うわけではない。何かがそこに表されているということが分かるためには、やはり想像力は働いているのである。しかし、このように限定をつけながらも、デュフレヌは次のように言う。

雲を意味するものとして知覚することは、雨、私に関わりのある或る雨を、その帰結と共に心配することである。キャンバスの上では、曇り空は雨を告げはせず、自分自身をしか告げない。雲という対象は表象されている

だけであり、想像力はあちこち探し回って諸々の可能性を持ちだしてくる必要はないのである。おそらく雲は、虚構のものであっても、常に、それもまた虚構のものである雨の先触れである。私はそのことを知っているが、この知は陰に隠れたままである。もしこの知があからさまになつてイメージとなつたら、もし私が雨を作り出すなら、私は美的対象を見失うのである。(PE51)

風景を描いた絵画を見る場合、描かれた風景を描かれた風景として見るということに関しては、想像力は働いている。その点においては、芸術作品の美的知覚における想像力の働きには、通常の知覚におけるそれと近いところがある。しかし、ここでデュフレンヌが言っているのは、眼前にあるものがさらに別の物を想像させるかどうかという違いに関わることである。通常の知覚においては、イメージは暗黙のものである。しかし、そこで知覚されているものが現実の知覚対象である以上は、この対象は、行動を促す可能性を持つものとして知覚されている。

通常の知覚によって知られた対象は現前し実在する対象

であり、そのようなものとして我々の行動を促す。そして想像力はこの行動あるいは我々の情念の可能な方向を描きだす。それに対して、その機能がまさに対象を表象することに於ける美的対象によって表象された対象は、純粹に表象された、したがって無害なものである(…)。芸術によって表象された対象は外部の何者にも送り返さない。それは世界の中にあるのではなく、世界を構成するのであり、この世界は表象された対象の内側にあるのである。(PE49)

通常の知覚において、想像力は、たしかに、対象がそれとして知覚されることを可能にするものであり、そこにおいて介在するイメージは、いわば暗黙のままにとどまる。しかし、その対象が知覚者の行動を促すということがあり、その場合には、想像力はさらに展開して、そこで知覚されているもの以外のものをも想像し、可能な行動を示唆することになる。しかし、美的対象の場合には、このような仕方では想像力は働かないのであり、その意味でデュフレンヌは、美的対象において経験的想像力は抑制されると言うのである。もちろん、美的対象をいわばきっかけとして想像力が働き他のことを想

像するということはあり得るだろう。しかし、それについては、デュフレヌは次のように述べる。

もし、逆に、私が知覚することを拒みつつ想像するならば、美的対象は消え去る。想像力は、それが知覚と協働するのでなければ、そして知覚の解任とともに、美的対象の放棄を要求するようなイメージの意識の相関者ではないものとしてでなければ、働くことを求められない。かくして私がシャルル八世を目指し、余分なものを取り払い、歴史から引き離すなら、私は作品に背を向けているのだ(…)。(DE451-452)

デュフレヌにとって、知覚と想像力は別のものではなく、知覚において想像力が働いている。しかしそれは、知覚の成立にあたって想像力が働くという限りにおいてであって、知覚することと、何かを思い浮かべるといふ意味で想像することとは別のことである。描かれたシャルル八世を見るのではなく、シャルル八世を想像する限りにおいて、すでに美的対象は見逃されている。知覚することと、何かを思い浮かべることとを分け、かつ、そこでシャルル八世の例を持ち出しつつ、

そこで思い浮かべられたシャルル八世は美的対象としては扱われないと述べることによって、デュフレヌは自らの立場がサルトルとは違うということを強調するのである。

最後に、ではなぜデュフレヌは、サルトルを批判するのにかについて考えてみよう。デュフレヌは、サルトルが知覚的意識と想像的意識を明確に区別することを批判した。デュフレヌによれば、サルトルにおいて「知覚と想像力は意識の還元不可能な二つの態度であり必然的に排除しあう。それはサルトルにとって想像力はつねに経験的なものだということである」(DE452)。デュフレヌは超越論的と経験的という二種類の想像力を考えている。超越論的想像力は、そもそも何かがあるという経験を可能にするものであるし、経験的想像力によって、対象の再認が可能になるのだから、知覚と想像力を切り離すことはできない。ただ、経験的想像力が自律的に展開し、知覚から離れていくことはあるのであり、サルトルが論じている想像力は、これに相当するとデュフレヌは考えているのである。エドワード・S・ケーシーは、デュフレヌが美的経験における想像力の働きを抑制的に考える理由を二つ挙げている。「第一は、美的対象がデュフレヌによって何よりもまず知覚された対象として考えられている

ということである。(…)第二の理由は作品が単に知覚されているのではないということにある。(…)我々がそれ(作品、引用者注)に入り込むのは情緒によってである」¹³。本論文に関わるのは第一の理由だが、本論文の立場から言えば、問題は知覚と想像力の区別そのものというよりも、むしろ、身体の問題にかかわっている。先に、超越論的想像力が身体的なものであるとデュフレンヌが言っていることを確認した。また、彼は、感覚的なものの開花としての美的対象は、身体によって迎えられるとも言っていた。さらに彼は、身体を共通感覚として、言い換えれば、間感的な移行のシステムとして捉えていた。雪の知覚において、雪は感覚的なものとして、すなわち白い色をしたものとして捉えられるが、そこに過去の経験から得られた冷たさのイメージが介入する。この冷たさは、それが最初に経験された時は触覚的経験であったはずである。それは記憶となり、新たな視覚経験に統合されて、そこで冷たい雪の知覚が成立する。デュフレンヌが間感的な移行という場合、そこで考えられていたのは、このような事例であると考えられる。ここでは同時的な諸感覚の交流が起こっているわけではなく、記憶が介在しているのだが、そのうえで、一種の感覚間の融合経験が起こっていると考え

られる。その点で言えば、知覚に想像力が介入するという場合でも、そこにはつねに身体が関わっているとと言える。しかし、このイメージが感覚的経験の支えなしに展開し始めるとき、感覚的なものは背景に押しやられる。それはすなわち、身体的経験が背後に退くということの意味する。デュフレンヌのサルトル批判の背後にあるのは、デュフレンヌにとっての身体の重要性ということである。サルトルがイメージの成立にあたっての想像的意識の重要性を説き、タブローはアナログンとしての役割しか果たさないと言う時、そこに身体性の後退が見られるとデュフレンヌは考えたのである。美的対象という語で指すべきものがサルトルとデュフレンヌにおいて異なるのも、サルトルのように想像的意識によって現れるイメージこそが美的対象であると言うことによつて、身体性が見失われるという危険が感じられたということであると考えられる。

結び

本論文では、デュフレンヌのイメージ論を、彼の想像力と

の関連において見てきた。彼において、イメージとは、主に、想像力によって潜在的なものとして知覚に統合された限りの記憶を指すものであり、知覚と想像力を密接な関係にあるものとみなす彼の理論においては、重要な役割を果たすものである。その点において、彼の想像力論は、サルトルのそれと鋭い対照をなすものである。潜在的なイメージが顕在化したものとしての意図的な想像力について、デュフレンヌは、少なくとも美的対象の知覚に関する限りでは、抑制されるものであると考える。そうでなければ、知覚と想像力を分離させて捉えることになるからである。知覚と想像力を明確に区別するサルトルに対し、少なくとも美的対象に関してはそれらが区別されるべきではないというのがデュフレンヌの立場である。そして、サルトルのイメージ論と想像力論に対するデュフレンヌの違いは、デュフレンヌにとっての身体的重要性にその要因を持つものであると考えられる。本論文ではデュフレンヌの初期の著作における想像力論を、サルトルとの関係において検討したが、デュフレンヌは晩年の著作まで一貫してこの概念にこだわり、展開させていった。その展開がいかなるものであったかについての検討は別の機会に譲ることとした。

註

1 二〇〇九年にデュフレンヌとメルローポンティの思想を比較する研究を発表したマイケル・バーマンは、「デュフレンヌについて」[大陸哲学の重要人物だが無視されてゐる] (Michael Berman, "Dufrenoye and Merleau-Ponty: A Comparative Meditation on Phenomenology", *Analecta Husserliana. The Yearbook of Phenomenological Research, Volume CIII. Phenomenology and Existentialism in the Twentieth Century. Book 1. New Waves of Philosophical Inspirations*, Edited by Anna-Teresa Tymieniecka, Dordrecht, Springer p. 145) と示している。²デュフレンヌに関する雑誌特集「論文集」研究書の代表的なものを以下に挙げる。Gilbert Laxcaux (dir.), *Vers une esthétique sans entrave. Mélanges offerts à Mikel Dufrenoye*, Paris, UGE, coll. « 10-18 », 1975 ; *Revue esthétique, nouvelle série*, no. 1 : « Hommage à Mikel Dufrenoye », 1992 ; *Revue esthétique*, no. 30 : « Mikel Dufrenoye : la vie, l'amour, la terre », 1997 ; Frédéric Jacquet, *Naitre au monde. Essai sur la philosophie de Mikel Dufrenoye*, Mimitésis, 2014 ; Jean-Baptiste Dussert et Adnen Jdey (sous la direction de), *Mikel Dufrenoye et l'esthétique. Entre phénoménologie et philosophie de la Nature*, Rennes, Presses Universitaires de Rennes, 2016. 日本語で読める文献はさらに少ないが、概説的なものはいくつかある。当津武彦「ミケル・デュフレンヌ」、澤瀉久敬編『続・現代フランス哲学』、雄渾社、一九七〇年、一九九―二二〇頁。山縣照「デュフレンヌ」、今道友信編『西洋美学のエッセンス 西洋美学理論の歴史と展開』、ペリカン社、一九八七年、三四七―三六七頁。H・スピーゲルバーク「ミケル・デュフレン

ンヌ(一九一〇—一九九五)『美的経験の現象学』、『現象学運動(下)』、立松弘孝監訳、世界書院、二〇〇〇年、二八一—二八九頁。ベルンハルト・ヴァルデンフェルス『フランスの現象学』、佐藤真理人監訳、阿部文彦・河合孝昭・澤里岳史・田口茂・田辺秋守・谷崎秋彦・野内聡訳、法政大学出版局、二〇〇九年、三九七—四一〇頁。書評、追悼記事等についてはここでは割愛するが、デュフレンヌを比較的大きく取り上げた研究文献として、以下のもののみ挙げておく。実川敏夫『メルローポンティをどう読むべきか』、『メルローポンティ超越の根源相』、創文社、二〇〇〇年、一五七—二五二頁、そのうち特に第三節「デュフレンヌによる読解」(同書二〇六—二三八頁参照。佐藤国郎「デュフレンヌの existential」)、『非存在の神学と非所有の哲学』ジャンケレヴィッチを超えて』、アルナ、二〇二二年、八七一—一〇三頁。

3 Edward S. Casey, « L'imagination comme intermédiaire », *Vers une esthétique sans entrave. Mélanges offerts à Michel Dufrenne*, pp. 93-113.

4 デュフレンヌが想像力を論じた論文としては次のようなものがある。
 ① Mikel Dufrenne, « Gaston Bachard et la poésie de l'imagination », *Jalons*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1966, pp. 174-187 ; Id. « Les a priori de l'imagination », *Archivo di filosofia*, Padua, Cedam, 1965, pp. 53-63. また想像力とも関わる「想像的なもの」については、以下を参照。
 Mikel Dufrenne, « L'imagnaire », *Esthétique et philosophie II*, Paris, Klincksieck, 1976, pp. 99-132 (この論文のもとになった日本における講演のテキストからの日本語訳として「ミケル・デュフレンヌ」『反抗的想像力——想像・欲望・言語・世界』(広田昌義訳)、『現代思想』

第一巻第一号、一九七三年、二六七—二八七頁がある。) ; Id. « Le jeu et l'imagnaire », *ibid.*, pp. 133-150. なお、本論は初期のデュフレンヌにおけるイメーシ概念を論じることを目的としており、これらの論文におけるデュフレンヌの思想の分析については他日を期すこととした。

5 以下の論述において、デュフレンヌ『美的経験の現象学』(Mikel Dufrenne, *Phénoménologie de l'expérience esthétique*, Paris, PUF, 1953)からの引用については著作名を PE と略し、頁数を付す。

6 ここでデュフレンヌがカントの産出的構想力の概念を念頭においているであろうことは容易に推測できる。デュフレンヌの言う「超越論的」な *Imagination* をカントの翻訳の伝統に倣って「構想力」と訳すことも可能かもしれないが、後で見えるようにデュフレンヌはこの概念を、サルトルや、本論では扱わないがアラランやバシユラルの想像力論との関係の中で練り上げていくのであり、そうした文脈を考慮して本論ではこれを「想像力」と訳すことにする。なお、デュフレンヌはハイデッガーによるカント論(『カントと形而上学の問題』)を重視し、『美的経験の現象学』においてしばしばこれに言及するが、デュフレンヌがハイデッガーによるこの著作をどう読んだかというのは本論の扱う範囲を超える大きな問題であり、これについても今後の課題としたい。

7 この個所でデュフレンヌは明記していないが、共通感覚としての身体、そして間感的な移行という点において、おそらく彼はメルローポンティの「知覚の現象学」の身体論を参考にしている。メルローポンティは次のように述べている。「(…)私の身体はまさに、等価

性と間感覚的置き換えの完全に出来上がった一つの体系である。諸感官は通訳を必要とすることなしに互いに翻訳され、観念を経る必要なしに互いに包含しあっている。これらの考察は、ヘルダーの言葉にそのすべての意味を与えることを可能にする。「人間とは共通感覚であって、ある時は一方の側から、またある時は他方から触れられる。』」(Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945, p. 271.)

8 Jean-Paul Sartre, *Imaginaire*, Paris, Gallimard, 1940, p. 38. シャン＝ポール・サルトル『サルトル全集第一二巻 想像力の問題 想像力の現象学的心理学』、平井啓之訳、人文書院、一九五五年、四九―五十頁。訳文は筆者によるが、訳出にあたっては平井訳を参照した。

9 *Ibid.*, p. 239. 邦訳三六一頁。

10 *Ibid.*, p. 240. 邦訳三六二頁。

11 デュフレヌは、『美的経験の現象学』の、本論でこれまで扱った個所とは別の部分でもサルトルの想像力論を論じている。そこでデュフレヌは、サルトルの想像力論においても、必ずしも想像されたものと知覚されたものは完全に切り離されておらず、アナローンがあつてこそ想像力も働くのだとするが、それでも知覚されたものは想像力が働くにあつて引き金の役しか果たしていないとする (PE260)。なお、デュフレヌがサルトルを主眼的に扱った論文としては、次のようなものがある。Mikel Dufrenne, « La critique de la raison dialectique », *Jalons*, La Haye, 1966, pp. 150-168 ; *Id.* « Notes sur Les aventures de la dialectique », *ibid.*, pp. 169-173 ; *Id.* « Sartre and Merleau-Ponty », translated from the french by Hugh J. Silverman and

Frederick A. Elitson, *Jean-Paul Sartre. Contemporary Approaches to His Philosophy*, edited by Hugh J. Silverman and Frederick A. Elitson, Pittsburgh, Duquesne University Press, 1980, pp. 209-218. これらはずれもサルトルの政治思想を論じたものである。サルトルにおいて想像力の問題は自由の問題に結びついているとすれば、サルトルの想像力論は政治論と無縁ではないが、本論の扱う範囲からは離れているという判断から、この文はこれらの論文については扱わなう。

12 この論点は「のちの『眼と耳』でも繰り返し返される。『潜在的なもの』が単に身体における言目の知でないならば(…)この潜在的なものに認められる現前は知覚されたものに内在する想像的なものの現前である。この想像的なものは想像され得るかもしれないが、必ずしも想像されない。生地の滑らかさは、その現前を私が企んでいるかのようにイメージにおいて現前していないが、それが決して知覚されたこととはなく、私の身体のうちに反響していないかのように全く不在で知られていないというでもない。それはそこに潜在的にあるのである」(Mikel Dufrenne, *Loeil et l'oreille*, Montréal, L'Hexagone, pp. 190-191. ミケル・デュフレヌ『眼と耳』、棧橋訳、みすず書房、一九九五年、二四三―二四四頁。訳文は筆者によるが、訳出にあつては棧橋を参照した。)。ここでデュフレヌが述べているのは、かつて生地に触れた触覚的経験の記憶が現在の知覚に介入し、実際に触れていないのに滑らかなが感じられるということである。

13 Edward S. Casey, « L'imagination comme intermédiaire », *Vers une esthétique sans entrave. Mélanges offerts à Mikel Dufrenne*, p. 101.